

学校図書館の課題、今とこれから

－「学校図書館を考える会・大分」の運動を通して－

齊藤 由美子

1997年からスタートした子ども文庫エルマーの貸出しにより、利用者は家庭でのよみきかせを広げ、さらにその後、学校でのよみきかせへと発展。2003年には、「学校図書館を考える会・大分」として市民運動へと派生し、現在も学校図書館制度の充実を求めて、署名・講演・申し入れ・陳情と、継続した活動を行っている。

長年、大分市の学校図書館には人の存在がなかった為、通常は施錠されているのが日常茶飯事。

以前、フリー参観の際、子どもの通う中学校の図書館をのぞいてみると、書架には蔵書が控えめに(?)並べられており(ランダムに通し番号順に配架という学校も結構ある)、残念ながら魅力的な空間と呼ぶには程遠かった。むしろ、ひと気のない図書館に足を踏み入れるのは、禁制の気配すらあり、見れば課題図書が購入されてズラリと並んでいたが、別の棚には同シリーズがその巻も含めて鎮座している。そもそも、課題図書の副本はやたらと多いが、今までこれらが活用された形跡を、子どもたちから感じたことは無いに等しい。

小学校の図書館でも、朝のよみきかせで読んだ絵本の確認はできず、よみきかせ後に、子どもがその本と再会する可能性は極めて低い。少しずつ定着してきた朝のよみきかせの実践は、子どもがその本に再び出会い、自ら手を伸ばしてくれた時にこそ目的が結実する。積み重ねるよみきかせの時間と、図書館での本との出会いを、できる事なら切り離さず、丁寧に繋げていきたいと考えていた。

そんなアレコレから始まった疑問と不満はやがて、**もしも、大分市の学校図書館に人がいたら・・・**という強い思いとなり、市議会への陳情へと繋がっていくことになる。

2004年6月大分市長、教育長に「学校図書館への司書配置」を要望して、15,253筆の署名を提出した。その頃、NPOの法人格取得が全盛期を迎えており、申し入れの際、市長から「皆さん方も、NPO法人で活動なさったら・・・」という言葉をさりげなく受けた。半ボランティアとも言えるNPO団体が、本来保障されるべき様々な分野の社会事業の、次なる担い手として見込まれようとしている気配に危惧しつつ、きっちりと“正規に携わる人”の重要性を強調して訴えた。

ともあれ、2007年春の市長選で、現職市長のマニフェストに“学校図書館”の件が盛り込まれていたところをみると、いくらかの印象は与えていたのかもしれない。

その年の6月議会の中で、“学校図書館支援員”の予算が計上され、9月から大分市内の小中学校には、2校にひとりの支援員が配置となり、現在に至っている。

一歩前進とは言え、専任ではない。配置となったからには、それなりの成果が求められ、成果が認められなければ簡単に消えていく制度とも言える。“図書館には人ありき”ということの意義を知る人は、まだ多くはないのだと嘆きたくなる。

けれども、だからこそ私たちはこの運動を絶やさず、常に子どもたちの傍に存在する“学校図書館”の重要性と役割を広く人々に訴え、関心を持続していかなければならない。そしてまた同時に、支援員の地位を保障し、有意義な研修の機会が確保できる様に運動を続けなければならない。

そうすると、図書館の充実には、保護者を代表とする子どもに関わる人の意識、制度に関わる自治体、そして現に図書館で仕事をする図書員、この三位一体の意識改革と向上が絶対に必要不可欠であることがいえる。まずはこの三者が、意味をもって繋がるために、仲立ちをしていかなければならないと痛感している。

現在、議会への陳情と署名活動は、支援員の存在を重視した上で、大規模校の専任配置の実現を(段階的にでも)求めることと、支援員の研修の充実を求めるという二つの趣旨で行っている。とりあえず、議会でも、教育委員会でも、常々“学校図書館”という単語が、使われていることすら大切だと思っている。

保護者の中には、司書・支援員の存在を知らない方も、もちろんいらっしゃる。司書教諭と司書(支援員)の違いや、その意味についてもさりげなく語り、広げることが望ましい。

2009年大分県は、県立図書館内に“子ども読書支援センター”を設置。読書推進事業として、子ども読書推進員の派遣を始めた。現在、私も読書推進員として、県内の様々な団体との出会いを体験している。

その活動の中でも、子どもの読書や図書館に関する認識を深めながら、今後の私たちの課題は見えてくる。

よみかかせの重要性を感じる人たちのエネルギーは、決して弱くなってはいない。ただ、子どもと本の中に立とうとする人の数は、残念ながら減少の兆しをみせているように思う。どこの団体も同様にそれを実感している。保護者の世代交代、少子化という社会現象もさることながら、今ここにきて2011年の新学習指導要領の影響も、今後追い打ちをかけるのではないかと懸念している。

おそらく文科省は、読書推進の意こそ消すことはないにせよ、新しい科目の導入に、「読書よりも…」という優先順位の入れ替わりが起こっても、現場の先生を咎めることはしないであろう。ただ、その責任は、読書指導が十分に許されていない支援員に向けられる。これは、どう考えても理不尽な話である。今後、読書やよみかかせの行く末は、よみかかせボランティアとしても、保護者としても、しっかりと見守る必要があるであろう。

最近、よみかかせに携わるメンバーの中から、学校の多読賞に関する悩みや質問を、度々受けるようになった。

「子どもには、読みたい本に出会い、読みたいものを読んで欲しいと思っている。でも、子どもは賞も欲しいらしく、容易に読めるものばかりを次々と借りてくる…」

切ない悩みであると思う。「読みたい本にであって欲しい。」これは切実な願いであり、多くの大人たちの思いである。ただ、図書館の利用状況が、貸出冊数で評価されるという紛れもない事実もそこにある。調査は通常、当たり前回数で問われている。

「どうして数なのでしょう？」そんな会話をすることは、残念ではあるが、希望でもある。生涯に亘り、本との出会いは、何冊であろうが意味があり、真に必要なものだと感じる人たちの存在がそこにはうかがえる。

本との出会いは、人との出会いに似ている。出会いのペースも出会いの数も、人それぞれに個性がある。逆に言えば、本との出会いも人との出会いのように、それぞれのペースが認められ、尊重されればよいと思う。

やはり、「図書館」の基本理念を問うていく必要があるのだろう。その為には、“図書館”や“司書(支援員)”のことをもっと話題にし、私たちの理想の図書館を突き詰めて、イメージしていかなければならない。

文庫が軌道に乗った当初、「もしも、大分市の図書館に人がいたら」と、視野を広げて思い描いたように、これからもまた、“本”や“読書”についてのイメージを広げ、学校図書館にいつも人がいたらどうなるか？を、皆に問いかけて、重要性を広げていきたい。

先に、「大分県としょかんびとの会」を立ち上げた。県内に散らばる現場の学校司書・支援員を結び、問題を共有しながら、学びの機会をつくっていかうと企てている。スキルアップで存在感を増し、現場の体力をつけることもまた、重要課題であるからだ。県内すべての学校図書館充実に向け、止まることなく、前進あるのみ！